



イラスト／平澤朋子

わたしの原風景

18 高樓方子

たかどのほうこ／児童文学作家

生まれてから十二歳で東京に引っ越すまで——つまり子ども時代のすべての年月を函館で過ごした。その日々を思ったとたん、函館山麓の古い町並みや、連絡船や港や、修道院や教会や、アーケードのある商店街や低い空を縦横に区切る市電の高架線など、函館らしい幾つもの光景が次から次へと浮かびあがり、むせそうになる。けれど、私自身にもっと張り付いた、ごくごく親密な風景は、どの町であってもかまわない住宅街にあった生家の庭なのだ。

初めて遊びに来る友達が、「だれあの人」と必ず声をひそめて指さすのは、麦藁帽とコム長でうろつく怪しい祖父の姿で、そのたびに、おじいちゃんたらまたいる！と、恥ずかしかった。(剪定道具を手に、今日はここの明日はあそこと誰かが木々や土をかまってるやらなければ、整然とした庭など望めやしないのだと気づいたのは、いい大人になってからだ)。祖父は「前庭」「中庭」と、ざっと三か所に分かれた敷地のすべてを一人でせつせと統治していたのだが、自己流の作庭のせいだろう、美しくないわけではないけれど、全体に、そこはかとなくヘンだった。たとえば「前庭」には、天を衝くような樅ノ木が四本、高く高く聳えて辺りに闇を落としていたのだが、闇の隣はのどかな藤棚になっていた。「庭」は、おもに花畑と野菜畑で、中を縫う二本の小道に沿って盆栽の棚がベンチのように並んでいた。「中庭」には苔や芝桜に覆われたお饅頭型の築山が三つ四つこんもり築かれ、その高からめ頂上には一位や紅葉などが身を寄せ合ってぎゅっと立ち、築山をめぐる蛇行した細道のあちこちには、躑躅や牡丹や石楠花や山吹や紫陽花などの低木が丸く蹲っていた。

午前中、昼下がり、夕暮れ、それぞれの光の下で庭をぶらぶらして祖父と言葉を交わしたり、開け放した縁側で足を投げ出し、しんとした「中庭」をぼつと眺めていたりした。思い出すと、樹々や草花が吐き出す酸素や、あの広がりを満たしていた空気が胸の奥までスーッと入り込んでくるようで、生き返った気持ちになるのだ。